常葉大学教育学部紀要〈報告〉
第38号　　2017.12.　　447頁～ 461頁

どうすれば毛筆で上手く文字が書けるのか

冨　山　敦　史

How can I write a letter well with a brushlet?

Atsushi TOMIYAMA

2017 年 9 月 6 日受理

抄　　録

本稿では、中学校教員免許（国語科）取得のために必要な「書道・書写Ａ」の全15 回の授業において、将来教員となる学生諸君が、「書写」授業の構築を行う際の具体的な指導法構築のための視点や「書写」授業に取り組む自信を獲得させる方策を探ることを目的とした。その結果、多角的な指導方法の観点の習得と「学び合い」での双方向的で親和的な雰囲気での練習（フィードバック）が書写指導における自信獲得に繋がることが分かった。毛筆で上手く字を書くためのポイントして、「姿勢」「筆の持ち方」「筆遣い（速さも含む）」「形･バランス」「ポイントの明確化」「メタ認知」「環境設定」「筆圧」を挙げ、その習得の過程を示した。また今後の書写の授業にはモデルとなる文字をインプットするという理論の部分とモデルとなる技能の部分をバランスよく取り上げていくことが求められることを課題として提案した。

キーワード：学習指導要領、書写、知識及び技能、学び合い、フィードバック

１．はじめに

平成 29 年 3 月 31 日に告示された次期学習指導要領では、国語科書写においては、これまでよりいっそう「知識及び技能」に重点が置かれたといえよう。従前「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の 3 領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕に構成し直している。また、〔知識及び技能〕の中に「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」「書写」「読書」に関する指導事項を設定し、「我が国の言語文化に関する事項」として整理し、内容の改善を図るとしている。

例えば、２内容においては、

⑶我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

（下線は稿者、以下同じ）

と、「身に付けることができるように指導する」とともに、その具体的な項目も明示

された。小中学校のいずれの学年においても「書写に関する次の事項を理解し使うこと」と事項の指導にとどまらず、それを理解し使えるようになることを明示している。以下、具体的に改訂された文言を中心に見てゆく。

○小学校学習指導要領

2 内容 〔知識及び技能〕

〔第 1 学年及び第 2 学年〕

(ア) 姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと。

(イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。

(ウ) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して、文字を正しく書くこと。

〔第 3 学年及び第 4 学年〕

(ア) 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。

(イ) 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。

(ウ) 毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと。

〔第 5 学年及び第 6 学年〕

(ア) 用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

(イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

(ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

また、「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」においても、〔知識及び技能〕に示す事項について、次のことが追加された。

(ア) 文字を正しく整えて書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること。

(エ) 第 1 学年及び第 2 学年の(3)のウの(イ)の指導については、適切に運筆する能力の向上につながるよう、指導を工夫すること

○中学校学習指導要領

中学校においては、小学校を踏まえつつ、次のように改訂されている。

2 内容 〔知識及び技能〕

〔第 1 学年〕では、

(イ) 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書くこと。

と、これまでの「理解して書く」から、「身近な文字」を行書で書く。すなわち日常生活に活かせる行書を書く技能を求めている。

〔第 3 学年〕では、

(ア) 身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと。

と、「文字文化の豊かさ」に触れることが示されている。なお、第 2 学年は現行のままである。

以上のことから、これからの小中学校における書写指導は、書字に関わる知識のみならず、それらを使い、実際に生活の中で書くことができる技能を児童生徒に身に付けさせることを目標としているのである。それは同時に、これらを指導する教員にもかなりの力量形成が求められるといえよう。では、どのように知識や技能を深め、児童生徒にそれをつたえていけばいいのだろうか。それを考えるヒントを子どもたちの言葉の中に見てみよう。

2．中学生のアンケートから

稿者は、前任校の中学1年生に対して「書写（書道）についてのアンケート」を実施した（2017）。項目と結果は次の通りである。なお今回は、一般的な小学校の傾向をつかむために附属校出身者は除き、奈良県40小学校、京都府14小学校、大阪府1小学校の合計51小学校の74名を対象としている。①では、出身小学校の名前を問うている。

②あなたは、塾などで「毛筆」の書写（書道）を習っていましたか。

1 はい	奈 16	京 / 大 9	計 25	（33.8%）
2 いいえ	奈 43	京 / 大 6	計 49	（66.2%）

③小学校の「毛筆」の書写（書道）の授業は、好きでしたか。

1　はい	奈 19	京 / 大 6	計 25	（33.8%）
2　いいえ	奈 35	京 / 大 6	計 41	（55.4%）
3 どちらでもない	奈 5	京 / 大 3	計 8	（10.8%）

理由・準備片付けが嫌だから1・神経を張り巡らさなければならないから1
・毛筆は好きだけれど先生が面白くないから1・先生が厳しいから1
・提出するのが面倒だから1・字を書くだけだから1
・字が汚くてまわりと比べてしまうから1・墨がつくから1

④あなたは、「毛筆」の書写（書道）の授業で学んだことが、日常生活に活かせていますか。

1 はい	奈 19	京 / 大 05	計 24	（32.4%）
2 いいえ	奈 39	京 / 大 10	計 49	（66.2%）
記載なし	奈 01	京 / 大 0	計 01	（ 1.4%）

⑤あなたは、「字を書くこと」がうまくなりたいですか。（毛筆以外も含みます）

1 はい	奈 55	京 / 大 15	計 70	（94.6%）
2 いいえ	奈 04	京 / 大 0	計 04	（ 5.4%）

理由・はい「字がきれいな方が気持ちがいいから」「きれいに書きたいから」
・いいえ「読めたら別に構わないから」「今のままでいいから」

⑥手紙をもらうなら「パソコンの文字」よりも「手書きの文字」のほうがいいですか。

1 はい	奈 50	京 / 大 14	計 64	（86.6%）
2 いいえ	奈 09	京 / 大 01	計 10	（13.4%）

⑦ノートなどに「字を書くこと」は得意ですか（鉛筆・ボールペン・シャープペンシル）

1 はい	奈 29	京 / 大 08	計 37	(50.0%)
2 いいえ	奈 30	京 / 大 07	計 37	(50.0%)

⑧どうすれば、「毛筆」の字がうまくなれると思いますか。あなたの考えを書いてください。(複数回答可)

⑧の回答を分析していく。一番回答が多かったのは、◆何度もひたすら練習する⒁である。これは十分予想はできたが、このことが子どもたちの経験値としての回答なのか、教員の指導の結果としての回答なのか。いずれにしても、以下に述べる結果の総体として吟味しなければ成らないだろう。

まず、書く「姿勢」に関するものとして、◆正しい姿勢を意識する⑶、次に「筆の持ち方」については、◆鉛筆、筆の正しい持ち方⑶◆筆の扱いを大切にする⑴が挙げられていた。「筆遣い」に関わっては、◆「とめ」「はね」「はらい」に気をつける⒇が圧倒的に多く、具体的なものとしては◆永字八法を意識する⑵◆「とん」「すうー」「とん」をしっかりする⑵などがあった。さらに具体的なものとしては、◆筆遣い、書き始めの位置⑴◆十時の方向に筆先を合わせてゆっくり書く⑴◆筆の角度など決まり事を守る⑵◆書き始めは、筆は斜め 45 度⑴など、先生の具体的な指導の姿を垣間見ることができる。ここでは出てこなかったが、「筆圧」の問題も大きなポイントである。

文字の「形・バランス」に関しては、◆文字の形、場所を意識する⑴◆形に気をつける (1) ◆小さく書かない (1) ◆バランスよく書く (4) ◆字のバランスを日頃から考えて書く⑴◆漢字の成り立ちを知る⑴◆字体の太さ細さ⑴◆書き順通り書く⑴◆書き順に気を配る⑴であった。「書き順(筆順)」については、自己流の筆順の誤りを直し正しい筆順で書くという意味も込められていた。また、漢字の「成り立ち」と「筆順」の関係もきわめて重要な指摘であると考えられる。成り立ちに戻って筆順を考える指導も大切にしたい。

「書く速さ」に関しては、◆ゆっくり書く⑴◆一画をゆっくり書く⑴◆流れるように書く⑴と、「ゆっくり書く」ことが具体的に挙げられている。とかく現場では、「勢い」「気合い」で書くという風潮もあるが、この「ゆっくり書く」、あるいは「ゆっくり書ける」ということの意味は深い。

心情面では、◆意識する⑵◆細かいことを意識する⑴◆細かいところまで丁寧に書く⑴◆丁寧に書く⑶◆丁寧に一画一画書く⑶◆一線一線を大切にする⑶◆硬筆の字をきれいに書く⑴◆正しく書く⑴◆力強く書く⑴◆落ち着いて書く⑴◆心を込める⑴◆緊張する⑴◆集中力を上げる⑴などが挙げられた。なお「意識する」ということが出てきたが、この中身は上述の具体的な事柄や次に述べる先生の述べた「ポイント」のことであろうと考えられる。

「先生とクラス環境」に関しては、◆ポイントを押さえる⑵◆先生の言ったポイント大切にする⑸◆先生の話をしっかり聞く⑴◆先生に文句を言わない⑴◆先生の真似をする⑴◆手本の真似をする⑴と、やはり、先生の示す「ポイント」を理解していく

ことが上手く書くことへの近道だと認識している。

一方、それを阻むものとして、教室環境の状況が示されている。◆集中する(4)◆喋らない(1)◆真剣に取り組む(1)◆みんなが毛筆をしようと思うこと(1)◆忘れ物をしない(1)◆静かにする(1)◆集中して書く(1)◆心（気持ち）を込める(4)◆心を落ち着かせる(1)◆思いを込めて書く(1)◆上手くなりたいという思いを持つ(2)◆落ち着いて書く(1)◆気合い(1)◆イライラしない(1)。これらの回答から書写を行う教室の状況が想像される。落ち着いて気持ちを込めてゆっくり丁寧に字を書くには教室環境を整えることが大前提となる。書写に向き合える教室、深い学びができる学び合いの空間をどのように作っていくのかが課題である。

また、自分の字を客観的に受け止めるメタ認知の必要性も提案されている。◆周りが静かなところで書く字をイメージする(1)◆自分の字を素直に受け止める(1)◆自分の思っている字の概念を捨てる(1)。モニタリングできる環境や切磋琢磨できる学び合いの方法の開発も求められているのである。最後に、◆左利きだが、右手で上手く書きたい、左手では書き順の関係でうまく書けない（でも上手く書きたい）(1)という子どもたちにも応えられる書写指導でありたい。利き手ではない手で書く書写の体験と研鑽も教員には必要であろう

3．大学生のアンケートから

中学生へのアンケートに先立ち、第１回「書道・書写Ａ」（ガイダンス）の授業においても、中学生とほぼ同様の「書写に対するアンケート調査」を実施した。このアンケートの目的は、教員を目指す学生諸君が、将来教育現場で「書写」の授業を行う際の具体的な指導法と指導にあたっての自信をつけるための方策を探ることと、全15回の授業を通して学生諸君の変容を把握し、授業内容のフィードバックに活かすことである。

○書写に対するアンケート調査（2017/04/10　受講者　34名）

①小中学校の「書写」の授業は、好きでしたか。

1はい	17（50%）
2いいえ	17（50%）

②「書写」の授業で学んだことが、日常生活に活かせていますか。

1はい	10（29%）
2いいえ	24（71%）

③字を書くことがうまくなりたいですか。

1はい	34（100%）
2いいえ	0（ 0%）

④手紙をもらうならパソコンの文字よりも手書きの文字がいいですか。

1はい	32（94%）
2いいえ	2（ 6%）

⑤黒板に字を書くのは得意ですか。

1はい　　1（3%）
2いいえ　　33（97%）

⑥どうすれば、字がうまくなれますか。あなたの考えを書いてください。（複数回答可）

⑥の結果を分析する。一番多かったのが、◆一点一画を丁寧に書く⑿であった。中学生の回答と違い「とめ」「はね」「はらい」などの具体的な名称は書かれていなかったが、学生の頭の中にはこれらのことは想起されているだろう。二番目は、◆繰り返し練習する⑻である。これもただ単に何度も練習するだけでは上達が望めず、後出する具体的なポイントを押さえながら練習することと解釈したい。これに関係して◆手書きで書く習慣をつける⑷が挙げられていて、パソコンやＳＮＳなどの普及により、手書きする機会が減っているので、あえて手書きする習慣を増やしていくことを提案している。次に多いのは◆字のバランスを取る⑺であり、字形をとらえる⑸へと続く。

その他の具体的な考えを中学生の回答と同様に分類列記する。「姿勢」では、◆姿勢を正す（正しい姿勢）⑴、「筆の持ち方」「筆遣い」等の技法では、◆筆の持ち方を正しくする（工夫する）⑷、「形・バランス」では、◆書き順を守る⑷ ◆四角の枠を意識する◆文字の組み立てを知る◆文字の大きさ。「練習」に関わっては、◆字を書く習慣をつける⑷◆丸や直線を多く書く（筆使いの練習）◆手本をなぞる◆お手本の特徴をつかむ◆右上がりを意識する。抽象的な考えとしては、◆上手い人のまねをする⑸◆字のポイントをつかむ⑵◆コツをつかむ◆心をこめる、が挙げられた。最後にメタ認知的発想では、◆書く前に字をイメージする◆自分の字の癖をよく見る、が挙げられている。

以上、２項に亘って中学生、大学生のアンケートを見てきたが、毛筆で上手く字を書くためのポイントしては、「姿勢」「筆の持ち方」「筆遣い（速さも含む）」「形・バランス」「ポイントの明確化」「メタ認知」「環境設定」を取り上げることが必要にあることがわかった。そして、アンケートの答えの中には具体的には出てこなかった「筆圧」についても、実際に書くことを行う際には切り離すことができない問題だといえる。これらのことは、現行の学習指導要領、次期学習指導要領で掲げられている文言とも密接に関わっているのである。次項では、上記のポイントに着目した大学の授業の実際を見ていきたい。

４．授業計画と授業の実際

○シラバスより

授業の概要：正しく整った楷書の書き方を、基本点画と筆使いから字形を取り方までを段階的に学ぶ。また、それに調和する仮名を取り上げる。次に、文字の大きさや配列など、毛筆を中心に扱い、硬筆書写への応用を図る。

＜授業の目的＞

小・中学校国語科書写の目的・性格などを理解し、楷書の原理を、実技をふまえて学習する。

＜授業の到達目標＞

「文字を正しく整えて書くこと」の内容を理解し、楷書及び楷書に調和する仮名の書き方を毛筆と硬筆で書写することができる。

〇授業計画と内容

第１回　ガイダンス・学校教育と書写

第２回　楷書の基本点画と筆使い①（横画・縦画）

・筆の持ち方（単鈎方、双鈎法）・腕の構え方（懸腕法、提腕法、枕腕法）

・筆先の運用（筆圧：バネを意識、筆先の通り道：始筆－送筆－終筆、筆の運び方）

・まる（左右／中→外、外→中）・横画と縦画・「山寺」の清書

第３回　楷書の基本点画と筆使い②（左・右はらい）

・バランスのとり方（大小・中心・方法）・「山寺」の復習

・払い（右払い／左払い）・始筆の意識（向きと角度と筆圧）

・穂先の通り道・終筆の書き方（筆圧と速度）・「友人」の清書

第４回　楷書の字形のとり方①（点画の長短・方向）

・「人」の復習・字形のとり方⑴長短：横画と左払い⑵方向：点の方向（始筆と終筆の筆先の向き）、曲がり・点画の接し方・「日光」の清書

第５回　楷書の字形のとり方②（交わり方・接し方）

・交わり方⑴「縦画」と「横画」→終筆を小さくまとめる、⑵「右払い」と「左払い」→中心線上、⑶「そり」と「左払い」→ほぼ直角∟に

・そり「戈法」⑴筆先の通り道の位置⑵筆の軸は回さない・「文武」の清書

・レポート「上手く書けない時はどうすればよいか」

第６回　楷書の字形のとり方③（組み立て方・左右　偏と旁の大小と幅）

・「点画の書き方」（動画視聴）→ゆっくり丁寧な筆遣いを動画で把握する

・偏の整え方⑴字幅を狭く縦長に⑵中心右寄り横画右上がりの度合いを高める⑶終筆の変化（右払いは点、最下部の横画は右上払い）

・左右（偏と旁）の組み立て⑴高低関係では底面の広い部分を上（高）にし、狭いものを下（低）にする⑵縦画の終筆は「下」にすると安定

・縦三分割の組み立て⑴それぞれの部分を細長くして接近させる⑵部分の高さに変化→各部分のいずれかの縦画の始筆が最も上に位置するように・「金銀」の清書

第７回　楷書の字形のとり方④（組み立て方・上下　冠と脚）

・冠と脚⑴扁平にする⑵幅はそのまま、高さを切り詰める→上下の割合は１：２または２：３⑶右払いが重なる場合→「とめ」「大小の差をつける、許容の形」・「竹笛」の清書

＊「竹笛」の練習清書にあたっては、上記を説明しただけで具体的なポイントは学生自身で考えさせるようにした

第８回　楷書の字形のとり方④（組み立て方・内外　構と繞と垂）

・構（二方、三方、四方）→縦画を垂直に立てる・繞（二方）→繞の中心が右に寄る、上に乗る部分は右払いの終筆直前の押さえ直しの位置より右横に広がらない・垂（二

方）→概形が台形になることを意識して横画を少し長く書く、垂の内部は文字の中心よりやや右にずらして書く　＊言葉だけで書くポイントを伝えることの是非
・課題「「進展」をバランスよく書く指導法を考える」班活動→交流→「進展」の清書
・宿題レポート「「の」を上手に書くための指導法を考える」→次回授業で発表する
第 9 回　平仮名の字形のとり方①（線の方向・大回りの線）
・「「の」を上手に書くための指導法を考える」の発表⑴どこに着目するか⑵筆遣い・穂先⑶練習方法
・指導法の班内交流→指導法の発表→発表内容を活かした実践（練習と「の」の清書）
・様々な線の練習→必ず筆を立てて持つこと
第 10 回　平仮名の字形のとり方②（右回りの線・結び）
・筆の弾力を感じる練習（筆圧を意識して）→筆の軸の上の方を持ち押しつけたり引き離してみたりしながら穂先の弾力を感じる
・平仮名の様々な線の練習（横、縦、斜め、点、右回り、左回り、大回り、結び折れ、回転とつながり、先から鋭く一息で、筆先の通り道、筆圧）
第 11 回　漢字と平仮名の調和①（文字の大きさと概形）
・漢字大、仮名小・文字の中心・余白（上下左右）・字間・行間
・「実りの秋」の清書
第 12 回　漢字と平仮名の調和②（文字の大きさと概形）
・画数の多い漢字の横画（右上がり、始筆と終筆は軽め）・筆圧は軽く筆を立てる
・筆圧（力加減の調整→筆軸の上の方を持ってみる）
・「静かな山の朝」の清書
第 13 回　小筆の使い方
・小筆の持ち方、構え方（提腕法、枕腕法）
・「夏山の緑うつりし小窓かな」（正岡子規）の練習と清書（三行＋氏名）
第 14 回　硬筆の書き方①　鉛筆の持ち方　縦書きと横書き
・正しい鉛筆の持ち方・筆圧とバランス　行頭揃えと余白（上下左右）・プリント演習
第 15 回　硬筆の書き方②　筆順と許容の形　＊質疑応答
＊定期試験「知識理解（硬筆含む）と実技（毛筆 5 字＋氏名）」
・毛筆の手本は半紙 1 ／ 2 大の大きさにした。
＊教科書：・「明解書写教育 増補新訂版」 萱原書房　2014
・小中学校書写各社教科書

5．大学生の変容

中学生と大学生がアンケート回答の中で指摘したポイントを授業の中で取り上げた。それぞれの授業の中で見られた学生の変容やフィードバックの一端を見ていく。
第 2 回「山寺」

◆筆の持ち方を詳しく習ったのは初めてだった、筆を垂直に立てることに慣れていきたい◆今までとまったく違う持ち方だった、書きにくいが慣れていきたい◆始筆と終筆を意識する。しっかり押さえること◆筆の運び方と力加減◆最後に止めるのと縦画が苦手だと分かりました◆縦と横の線、「はらい」「はね」の練習では、送筆の時も筆先の通り道を変えずに書けるようにした◆筆先の向きを意識しながら書いてみると、今までは縦画を書くときに意識せず筆先が中に入ってしまっていたことに気づいた、頭で考えて癖を直したい◆筆先を意識して、立てて書くことで、線が出てきた◆墨を筆につけると素早く書いてしまうため、ゆっくりと書くことに気をつけたい◆どうしても一文字目が大きくなる

第3回「友人」

◆左右ではらいが違うこと、筆圧を変えるのとでうまくはらうことができると学んだ◆ゆっくりと筆の運びやポイントを押さえて書くと一枚書くだけでずいぶん疲れた、何気なく書くよりも上手く書けることがわかった◆力強くとめる所はゆっくりしっかりとめてから払いたい◆筆圧のかけ方は何度もやらないとできるようにならない◆終筆の部分で上にだんだんと離すことを意識すると右払いの三角形のようになるところが形になってきた

◆「はらい」の筆の押し加減が難しく、しっかり押さないとその先の「上げ」がきれいに書けないことが書きながらわかった◆「筆先を中に入れない」「しっかり押さえつける」「筆先を残す」これがポイントだ◆筆圧を変えることで太さに変化を出せるため、曲がるときなど意識したい◆一番大切なのは筆を立てることだ◆周りの人の書いている様子を見て自分との違いを確認しコツが掴めた◆小学校以来できなかった「はらい」が今回克服できた、この「できなかった体験」が児童生徒に教える時に活かせるので忘れない

第4回「日光」

◆「日光」にはこれまで習った「とめ」「はね」「はらい」が詰め込まれている、部分一つ一つを見ながらも全体を見て書けるように練習したい◆「光」最後のはねは、自分が考えているよりもっと筆をぎゅっと押さえつけることを意識したい◆「光」の曲がりからの「はね」は、少し右上がりを意識するだけで勢いが大きく変わる◆バランスが取りにくい「光」は下の部分を大きくし縦長を意識するだけで変わる◆「日」の縦の左右で少し太さを変えるだけでバランスの良い字になって驚いた◆「口」は横が出て「日」は縦が出るとは知らなかった◆友達と見合って修正点を指摘し合うことで直すべきポイントを客観的に見つけることができるとともに作品や相手の作品と改めて向き合うことができた＊相互批正やメタ認知力を高めてきている。◆段々と筆遣いがわかってきてモチベーションがあがり、家で練習できる気がしてきた◆筆圧など今まで意識してこなかったところを注意できるようになり成長を実感している◆筆を換えただけで今まで書けなかった線が出せるようになって驚いた◆今日が一番上達を実感できた、一回目と最後とが全く違う◆力加減と筆を立てること◆双鈎法に慣れてきて書きやすいと感じるようになってきた

第５回「上手く書けない時はどうすればいか」を考える、「文武」
◆基本に戻る「姿勢」「持ち方」「筆を立てる」「筆先」「筆圧」◆空書き、爪でなぞり書きしイメージを掴む◆周りに意見を求める◆手本の敷き写しして自分の字と比べる◆半紙を折る、手本も折る→見比べる◆中心線を意識する◆何処から始まり何処に向かい何処に繋がるか考える◆友達の書いている様子を見る→アドバイスをもらう→自分の癖を知る（客観化）◆ゆっくりと書く◆文字の形（台形や三角形）を意識する、文字は左右対称ではなく長さや形に違いがある◆部分練習をする◆他人のどこを見るかという視点（筆先、腕の位置、筆の立て方、バランス等）を持つ◆上手く書けなかった所に丸印をつけチェックする→それを手本の横に置き書き直す◆書き上げたものと手本を見比べ、上からもう一度なぞり書きをする◆一字に集中するのではなく全体を見て「書くシミュレーションをする」ことが大切
第６回「金銀」
◆中国人の先生の筆遣いはゆっくり丁寧なのに、勢いがある美しい「はね」を書いていた◆ゆっくり丁寧に書くことで形が整うようになった◆「はね」の筆先の先まで意識していて、「一筆を大切にする」ことはこういうことだとわかった◆実際にやってみて実感できた◆自分自身のペースでゆっくりじっくり書くことがバランスをとって書く最大の近道だとわかった◆ゆっくり書けるということは筆をコントロールできているということ、筆圧が最大の課題だ◆字と字とのつなぎ目が難しい◆偏と旁の大きさのバランスが難しい、偏と旁の幅の広い狭いで印象が全然違ってくる◆上下の字の大きさが難しいが「銀」から先に書くとバランスをとることができた
第７回「竹笛」
◆「竹」のポイントは偏と旁の終筆の高さ（段差）◆左側の「竹」三画目を少し短くすること、内側に少し入れること◆「由」の四つ部屋の大きさにばらつきがあると不恰好に見える◆細い部分と太い部分の違いをはっきりつける◆「笛」は竹冠と由のバランスが難しい、竹冠を上の方に書く◆手本を見ながら書くとバランスが良くならない、かえって悪くなる◆画数が少ない字ほど線の太さや細さで勝負しなければいけないので「筆圧」が重要だ◆手本を見て感覚だけで書いていても上達しない、正確さを引き出すためには理論・理屈が必要だ◆最近では、周囲の人と「こうした方がいいよ、ここがよくできているよ」と伝え合うことを活用して頑張っている
第８回「進展」の指導法（話し合い→交流→実践「清書」）
◆「辶」「尸」は半紙縦横三等分し位置を確認する、「尸」は「台形」を意識する◆一文字を３×３の９マスに分けて考えながら書くとバランスがとりやすくなると実感した◆紙を折る、目印をつけるなどバランス良くするための工夫が必要◆「辶」の下の部分を空けると整う◆「垂」は伸ばし過ぎず空間を作ることがきれいに見せる◆人に伝える言葉選びが難しい（自分が思っていることと、聞き手が聞いて思うことにずれがある）◆子どもに伝わる言葉で説明しなければならない◆たくさんのポイントをすべて言うと児童は混乱する、絞らないといけない◆児童の実態にあったポイントを見つける◆口頭で言うだけでなく、黒板、水書板、実技、手をとっての指導、用紙にま

とめることも同時に必要だ◆言葉でなるほどそうなると言えても実際に書いて表現できない◆頭の中でイメージする文字と実際の文字とが一致しないので困った◆自分一人で考えるには限界があり、班や全体の交流を行うことで、気がつかなかったことがたくさん見えてきた。

第 9 回「の」の指導法（プレゼンテーション）と「の」の清書

◆教科書には「筆を返して書く」と書いてあたったが具体的にどういうことか伝えられるようになりたい◆「の」は始筆の位置、曲がるときの穂先の向きに注意する◆半紙を十字に折って始筆を真ん中より高めから書き始める◆練習法は円「○」の中に収まるように書く、半紙を四つ折りにする、斜めに円を続けて書いていく（ひと筆書き）◆筆先の向きを意識しながら、筆圧の強弱を考える◆曲がるときの「筆先の通る位置」と「止めること」と「筆圧のかけ方」◆発表するために色々と調べたことが自信になり、いつもより上手くかけた、書道にも予習が必要だ◆「返し」の部分を「筆先」だけで曲げると最後の「はらい」が裂けるので、「筆圧」である程度の調整が必要だ◆「返し」部分の力加減（筆圧、回すときに止めるか止めないか）◆「返し」のところで筆先が揃うように押さえなおすことが大事◆「返し」では筆を一度上げて筆圧を少なくすることで上手に曲がることができる◆多様な指導アイディアが出てきて指導方法研究の大切さを改めて知った

第 10 回「平仮名の様々な線」の練習

◆平仮名は漢字を崩したものという「成り立ち」を考えて柔らかな筆遣いを意識することが大切だ◆一息で書くこと◆筆先や力加減（筆圧）への配慮が漢字より必要だ◆曲線が多いので勢いと流れ（つながり）が大切◆筆先を鋭くして一息で書く◆次につながっていく意識で書く（滑らかさ）◆漢字と比べ始筆が異なる◆手首の硬さが関係しているのだろうか（小学生の方が手首は柔らかい）

第 11 回「実りの秋」（漢字に調和した平仮名：4 字）

◆半紙 1 ／ 4 に「一字」収めること→どうバランスをとるか漢字大、平仮名小◆漢字（楷書）と平仮名の筆遣いの違いに混乱する◆平仮名は「丸さ」と「つながり」を意識する◆漢字の角と平仮名の丸みのコントラストが魅力である◆半紙の限られた「枠」を意識したい◆

第 12 回「静かな山の朝」（漢字に調和した平仮名：6 字）

◆筆を立てて書く（立てないと画数の多い字は書けない）◆漢字と平仮名の差を出す書き方◆画数の多い「静」と「朝」は横画を細くしようと意識した◆中心線に寄せて書くときれいに見える（偏と旁）◆書写（毛筆）を教えるコツのようなものがわかってきた◆先週の四字より六字のほうが半紙に収めやすいように感じた◆はじめに書いた「山寺」の「山」に比べて、今回の「山」に自分の成長を感じた

第 13 回小筆「夏山の緑うつりし小窓かな」

◆提腕法、枕腕法→手を置く位置、腕の上げ方に注意◆大筆の感覚（筆を立てること、筆圧の調整）は活かせる◆気を抜くと鉛筆の持ち方の角度になってしまう◆「か」「な」など空間とのバランスが難しい◆行の中心や字間、行間、左右の余白を意識して書く

ことが大事
第 14 回「硬筆」鉛筆の持ち方・筆圧・バランス
◆正しい鉛筆の持ち方は疲れる、毛筆と違い軸を握る力が強くなり疲れた→力加減（筆圧）の調整と正しい持ち方の獲得◆正しい姿勢も大切だ、つい目を近づけてしまう◆書写する速度の違いを痛感した◆始筆終筆を意識するだけで美しい字、いつもと違う字が書けた◆自分の字にならないように注意した、筆順も字形も自分が意識すれば変わっていくと実感できた◆お手本通り書くことで平仮名の部分の細かな違いに気がついた◆一度ついてしまった癖はなかなか直せないので、小学校 1 年生で正しい書き方を身につけることはとても大事なことだと実感した◆鉛筆で書くことは、文字を手書きする基礎の基礎だと実感した、教える側の責任を感じた
第 15 回「硬筆」筆順と許容・まとめ・質疑応答
〔14 回分の授業の小レポートと清書作品を振り返って〕
◆初めに「山寺」を書いた日から毎回成長があったのは「筆遣い」であった。少しずつだが半紙に文字を収められるようになり着実な進歩があった。
◆筆の入る形や縦と横の線の太さの違い、字のバランスや全体のバランスのとり方が特に上達していた。筆遣いにも慣れ、「とめ」「はね」「はらい」を自分のやりたいようにできるようになった。課題は画数の多い漢字や平仮名の字の形をイメージし、そのイメージ通りに手を動かす練習がまだ必要であり、集中力や空間認知力を養う必要がある
◆仮名を書いていくうちに、力を入れるところと抜くところが身に付いた
◆「右払い」の書き方を通じて「とめる」ことの大切さがわかったので、「はね」のときにも応用できた。
◆始筆や終筆はだんだん意識して書けるようになったが、半紙に対する文字のバランスや文字数や画数、漢字と平仮名などを意識したバランスをとることが課題になる。
◆ゆっくりと書くことを意識するようになったおかげで、「はらい」がきれいに書けるようになった。
◆できるようになったのは始筆の入り方と「はらい」である。漢字と平仮名の差が出るように書くことが課題である。◆ 15 回を通して「筆圧」の加減ができるようになった。最初は恐る恐る書いていたが回を重ねるごとに太く細く書き分けられるようになった。
◆回数を重ねるにつれて「筆先」を意識して書くことができた。特に後半は「筆先を意識しよう」ということを自発的に行うことができた。
◆全体を通して成長できたと感じる部分は「始筆」と「終筆」である。その要因として考えられるのは「筆をまっすぐ、机に対して垂直に持つ」ことを徹底できたからだと思う。
◆ 15 回を通じて、字形に気を付けるようになったことと筆を立てることができるようになったことで上手に書けるようになった。
◆レポートを振り返ってみると、「バランス」と「筆の持ち方」を反省する言葉が多かっ

た。筆の持ち方は書写の基礎、土台となる部分であるので大切にしたい。
◆ 15 回を通してお手本をしっかりと分析して書く力が身に付いたと思う。普段から字を意識して書きたい。
◆紙の中に収められるようになった。これは全体のバランスをとる力がついたからだと考えられる。
◆自分は 4 月と比べて「力加減」「バランス」「筆の運び方」がだいぶん上達したと思う。それぞれの字の特徴を捉えながら書くことができるようになった。

6．成果と課題

⑴成果

15 回の授業を通して学生諸君は、学習指導要領で述べられている〔知識及び技能〕に相当する事項を実際に体験することができた。教科書に載っている書写に関わる用語という捉えではなく、それが表す具体的な技法を脳裏に浮かべることができるようになりつつあると思われる（自分自身が実際に表現できるかどうかは措いておく）。このことは将来､児童生徒を念頭において指導方法を考えるときの確かな前提となり、自身がどのように技術を獲得し定着させていくかを考える際の道しるべにもなるであろう。また、それぞれの実技は、知識やそれを裏付ける理論や理屈にあることに気づいたと思われる。技術を知り、それが具体的な技として自分自身のものとなるには、継続的な鍛錬が必要である。技能の向上に向けてどのようなポイントをどのように克服していくかを主体的な対話を通し探究し、親和的な学び合いの中で発見し深めていく体験により、そのことに立ち向かっていく勇気と楽しみも少しは喚起できたのではないだろうか。

⑵今後の課題

課題としては、「字形」に関わることで、「紙の大きさに適した字の大きさをどう認識すればよいか」が挙げられる。これは、例えば、「半紙の中に収まるちょうどいい大きさの文字が書ける」ことである。「バランスをとる」という回答がアンケートに出ているのが、これに相当するのかもしれない。「与えられたもの」（半紙、便箋、掲示板、看板等）に対して、ちょうどよい大きさの文字（美しい文字、バランスがとれた文字）を書くことは、空間を認識しバランスを考えて配置する力（空間認知・空間処理の能力）に関わってくる。この力は、特に次期学習指導要領で求められる「生活に生きる書写」という実用的な書写の力ともいえよう。では、どのようにしてこの力を育成していけばいいのか。難しい課題だが、今回の授業の中での取組の一端を紹介する。

手本通りにそのまま書くということが指導の一つの目安になる。手本通りということは、筆遣いはもとより、字の大きさやバランスもできるだけ同じように書くということを意味する。それなら、手本の大きさは半紙と同じにして、敷き写すという方法も考えられる。第 1 段階として、この「敷き写し」をしてみるのも有効である。このことで半紙の枠（空間）を認識しつつ、それに相応しい文字の大きさを意識すること

が徐々にできるようになる。特にバランスを取ることが難しい手本（課題）についてはこれを実践した。第2段階としては、すべて「敷き写し」をすることはできないので、学生に「配布する手本の大きさを徐々に変えてみる」ことを行った。ここでは、「敷き写し」で掴んだことを活かしつつ、「手本を見て書く」ということにした。はじめは半紙大、次に半紙より大きいもの。また、半紙1／2、半紙1／4へ縮小した手本を配布し、清書を行った。このことから学生は、単に原寸大の字をそのまま写すときよりも、半紙の大きさ（枠）を認知し、それに対応する大きさ・配置を様々な方法で模索した。ある学生は半紙と手本を折って対応させていき、ある学生は始筆や終筆の位置を半紙に爪で印をつけ見当をつけて書いた。これらは芸術的な書道からいえば邪道なのかもしれないが、そうしていくことにより自然に配置を考える力が培われたように思われる。また、手本に配置される字の数によって、それぞれの字の形を変化（縦横変倍）させることも自然に行われた。例えば、二字の場合は比較的横長になり、四字の場合は縦長となる。これも半紙の「枠」への配置を念頭においたことにより学生に培われた力である。第3段階は「手本を見ないで書く」ということである。手本を見ながら書くということは、反面その手本の字に縛られるということでもある。一般に手本を詳しく見ながら書くと大きな字になるといわれている。そこで第2段階の取組のあとに、活字のまま（教科書体）の手本を使うことを試みた。手本が活字の場合、これまでに学んだポイントを頭の中にイメージして書くことを余儀なくされる。それぞれの文字の筆画や書き方をもう一度頭の中に想起するなど、既習の知識や技能を総括することでポイントが整理されるのである。実生活の中では、いわゆる手本が示されている訳ではないので、このことは「実生活に生きる書写の力」に直結すると考えられる。

頭の中にイメージされた文字を実際に腕や躰を使って、毛筆で表現することはなかなか困難な作業である。イメージとそれを表現する技能はただ単に練習を重ねるだけでは身に付けることが難しい。それには、イメージされた文字と書かれた文字の可否を自分で比較判断していく基準が必要となる。文字がどのように構成されると美しくなるのかという文字骨格の理論を学ぶことが大切である。モデルとなる文字をインプットするという理論の部分、すなわち「ものの見方」（書体の変遷などの文字文化）とモデルとなる技術の部分、すなわち具体的にどのように書くかという「技能」をバランスよく取り上げていくことが今後の書写の授業に求められている。

参考文献

- 文部科学省「学習指導要領」 2008
- 文部科学省「学習指導要領」 2017
- 全国大学書写書道教育学会編「明解書写教育 増補新訂版」萱原書房 2014
- 飯森由美「毛筆書写教育における実技指導技術」千葉経済大学短期大学部 研究紀要第6号 (123 ～ 128) 2010
- 「書写 筆使いの基礎－ 4つの視点を意識した上達術」（DVD）福井県教育委員会

2017　この教材では、視点①「穂先の方向」、視点②「運筆速度」、視点③「筆圧」、視点④「筆の軸」の 4 つの視点を設定し、実演とともに筆使いを解説している。

謝辞

アンケートに協力してくださった奈良教育大学附属中学校の第 1 学年の皆さん、山本佑子先生、青木聡子先生、2017 年度前期「書道・書写Ａ」受講生の皆様に深く感謝致します。